



立ち読み版

プロローグ

第一章 気高き王族母娘、女淫魔、ベラリアとの最終戦

第二章 触手淫膾改造、怨敵が貪るロストヴァージン

第三章 触手淫乳改造、射乳ぶっかけ馬乗りパイズリ

第四章 触手淫肛改造、将心へし折るアナルセックス

第五章 いいわけ破廉恥オナニー、母女王の背徳パイズリフェラ

第六章 禁断クリペニス筆おろし、完全敗墮の王族母娘は肉便女

エピローグ

006

008

039

080

121

161

206

252

登場人物紹介

Characters



レイア=バレスティス

ラウラ王国の守護を司る女将軍。二十歳という若さで騎士団を束ねる。クールで潔癖であるが、国民思いの人情家。女王エイリスの実子だが、髪の色は父譲りの黒。



エイリス=バレスティス

ラウラ王国の女王。国民思いの優しい性格と元首としての厳しさも持つ。魔法に長けており、その力を使ってレイアを支えている。夫であった王を早くに亡くした未亡人。



ベラリア

魔物の軍勢を率いて、ラウラ王国を襲撃する淫魔の女王。年齢不詳。若々しい姿を保ち、人間たちを墮落させることに悦びを感じている。

両腕を頭上で縛られているレイアは、総身を淫らにくねらせ、鎖を鳴らす。

「ギヒヒッ！ マンコをクンニされて喜んでるゾ」

「あれでも処女ブヒ？ あの王女、生まれついで淫乱じゃねーかブヒ」

下品にはやしたてる魔物ども。両手を鳴らし、身体を揺らして喜んでいる。

「ふう……そろそろよかろう」

ペラリアがようやく口を離す。

性器の周囲に居座っていた触手粘液は綺麗に取り除かれている。

だが、肉アワビの前面は、代わりにペラリアの唾液でベチョベチョだった。小指の幅に開いては閉じる秘裂からも新しい恥蜜が雨だれのように流れている。出来立ての料理のように熱く甘酸っぱい蒸気をくゆらせる様は、魔物どもの目を残らず奪い、その股間に牡欲を充実させている。

「では、お主の処女をいただこうか」

口についた汁をロンググロープの手で拭うと、ボンテージショーツを脱ぎ捨てる。

淫魔の陰唇は肉畝と呼びたくなる肉のつきようだった。

自分を責め立てることで悦楽を得ていたようで、指の幅に開いた秘裂からは、蜂蜜のように甘い匂いの性汁が漏れている。体臭と同じく、嗅いでいると妙にリラクセスしてしまう不思議な匂いで、熱く立っていた周囲の魔物も心持ち大人しくなり、代わりに鼻の下が伸びている気がした。

(こいつ……どうするつもりだ？ ……触手では膜は破らないと言っていたが……)

訝しく思っていると、ベラリアは呪文を唱えた。

すると、陰唇をかき分け、棒状の何かが突出してきた。

「なっ……なんだ……！」

「これがわしの魔羅じゃ」

二十センチほどに伸び上がり、指を三、四本束ねた太さで落ち着いたそれは、腹に向かつて反り返っている。兜の形の先端は鈍く尖り、裾はキノコみたいに広がっていた。傘部と幹部の高低差が激しい段差は、ランスや剣の鏢つばと柄つかの関係を彷彿とさせる。準備運動でもするかのように、幹部を抜くベラリア。

股間から生えたものは、他の部分と同じき細かいミルク色をしているが、兜に似た逆三角の尖端は、粘膜で覆われて鈍く光る赤紫色。ひと扱きする度にビクビク大きく脈打つて、自身も気持ちよさそうに目を細めるあたり、感覚は繋がっているのだろう。

(あれはペニスか……?)

魔羅という俗称は知らないが、男性器のことは知っている。淫魔のそれは書物で見たり伝え聞いたものよりもずっと逞しく凶悪に見えた。

(綺麗だが……グロテスクだ……しかし……見ていると胸が高鳴る……何故だ……?)

敵が魔法で生やしたものの。気色のいいものではないと頭ではわかるのだが、どういいうわげか見ていると胸がドキドキして、目を離すべきだと思っても後ろ髪を引かれる思いが湧

いてくる。熱くなっている股間も子宮口まで鈍く疼き、触手に掻き回されていた時の記憶が蘇って仕方がない。

「ゆくぞ……」

ベラリアは自分の十指を触手に変え、レイアの両足と腰に絡ませた。

両手を頭上で縛られた王女は、力ずくでガニ股の体勢をとらされる。

「貴様は……どこまで私を辱めるつもりだっ……こんな情けない格好をさせるなど！」
下品なポーズをさせられて歯噛みするレイア。

蛇の太さ程度の触手だが、大男に押さえつけられている風に身体の内は利かない。含み笑いをするベラリアは、ガニ股の間に身体を滑り込ませて仰向けになる。

細腰に絡みつくと触手が、王女將軍の生股間を徐々に降下させていく。

直下には、根本に絡みついた触手によって直立した敵の肉棒。

ビクンビクン震えながら、レイアの秘裂の蜜を浴び、ますます照り光っている。
（敵に……処女膜を破られるっ……敵が……最初の性交相手になるなど……ッ！）

悪の淫魔に初めてを奪われる。

考えただけでもゾツとする。王女として女として、絶対に避けたい。

しかし、いくら力を込めて足を踏ん張っても触手のなすがまま。腰は落ちる一方だ。仕掛けはわからないが、頭上の鎖はゴムのように伸び、挿入の邪魔になっていない。

クチユツ……。

濡れた秘裂に、ベラリアのペニスの先がめり込む。

感触は人間の肉と同じだった。柔らかいのに鋼の棒のように硬く、炎じみたぬくもりを帯びている。陰唇と触れあいながら脈打っているが、伝わってくる振動は躍動的で、血の通った肉と海綿体の塊——知識では知っていたペニスとしか思えない。

「ククク、これがお主の処女膜だな……今わしが破ってやるっ」

レイアを見上げるベラリアは、小さく腰を上下動させ、膜を軽く突いてくる。

「ヤっちまってくださいベラリアさまブヒ！」

「生意気王女の処女膜なんか、思いきり破っちまえギギ！」

魔物どもの無数の目が、自分たちを滅ぼそうとした王女の股間に注がれていた。

瞳のない目が送ってくる視線は強く、口走る罵声も熱狂的。

殺気だっているとも、発情しているともとれる、牡欲望たつぷりの熱感だ。

そしてどの魔物も、腰蓑や腰布から剥き出しの肉棒を熱り立たせている。

「クッ……!!」

魔物どもの雰囲気と、牡臭くゆるペニスが林立する様子にとられた瞬間、

ブヂイッッッ!!!

「——ッッッ!!!」

迸る灼熱の痛感。触手で腰を下げさせるのではなく、レイアに触手を絡ませたまま、ベラリアは自分から腰を突き上げ、王女将軍を女にした。

「クハハハ！ いい破り心地じゃぞ！ お主の処女、ベラリアが確かに頂戴した！」

亀頭をすつかり埋め込まれ、その輪郭通りに左右に大きく広がった秘裂から、ツーツと鮮血が垂れてきた。先に肉棒を伝い降りていた愛液を押しながら、根本へ向かっていく。

わつと歓声が沸き起こる。魔物どもは皆、邪悪な笑みを浮かべている。身体を強張らせ、苦痛に歯を食い縛る生意気な女將軍の姿は、化物の鼻息をますます荒らげさせていた。

（く、くそう……この痛み、忘れないぞ……この屈辱、必ず晴らしてやる……！）

無理矢理成長させられた秘唇から流れる血と、埋め込まれる敵の肉棒を見詰めながら、憎悪を漲らせる。苦痛の呻きも、脂汗を滲ませながら嘔み殺す。痛がる素振りを見せても、魔物どもを喜ばせ、ラウラ王国の名に傷をつけるだけなのだ。

一方で、ベラリアは絡ませていた触手を手指に戻し、女將軍らしく引き締まった細腰を掴んでいた。そのまま自分の尻を床に置くと、レイアの腰を自分のほうへと引き寄せる。

「ぐうっ……うああ……ああ……っ」

処女だった膣は、じわじわベラリアの肉棒を頬張らされる。

溜まっていた愛液が、ジュブリと鈍い音を立てて溢れてきた。

（なんだ……これは……私は処女膜を破られたというのに……もう痛みが引いている……？ それどころか……気持ちいい、だと……？）

膜を貫かれた時こそ、身体を引き裂かれるような痛みが全身を駆け抜け、表に出さないようにするのに苦心させられた。しかし、ベラリアの肉棒を埋められるに従って痛みは薄

くなり、激痛の余韻さえも消えていく。

陰唇をめぐり返す淫巨根は、閉ざされていた腔内を自分の形にこじ開けながら進む。触手に責められ、ベラリアにも舐められた蜜ヒダが引つ搔かれ、甘い快感が広がる。力づくで腔を広げられる圧迫感も、苦しいと言うよりは心地いい息の詰まりだった。

「はあ……はあ……ん、ンン……くそお……離れろ、ベラリア……あふウウ」
敵の淫魔相手に、こんな気持ちになってはいけないのに。

下衆な魔物どもが、瞬きもしないで見ているというのに。

「触手で散々嬲ってやったからの。心はまだ正気のようにじゃが、身体は随分と牝らしくなっておる。堪らんじゃろ？ 身体が言うことを聞かないというのは悔しいじゃろ？」

鍛え戦う女の並外れた締めつけと、触手でほぐして蜜が出やすいように改造された柔ヒダを備えたレイアの腔は、仇敵のペニスを心地よく抱きしめてくる。

腰を振り、じつくり耕す風に擦ってやると、ペニスの隅々にピツタリ重なる蜜ヒダは嬉しそうに蠢いた。弛みそうな眉目を必死に吊り上げて快感を否定しようとしている顔の筋肉はヒクつき、負けん気の強い女王將軍は悔しそうに汗を浮かせる。そんな顔を見ながら腰を振っていると、ペニスはカッカと熱くなり、甘く魅惑的な痺れが溜まっていく。

「ふう、ふう……ああ、気持ちいいぞ、レイア……ほれ、お主も腰を振ってみい。ともに快楽を貪ろうぞ。余計なことは忘れ、目の前の快楽にすがれ……んうっ……」

「誰が……はあう、ああッ……きさまなどの軍門にくだるも……っう、うくう……ッ」

ゆっくりだがベラリアは好き勝手に腰を振ってくる。

冷たい美顔に細かい汗を浮かせながら、ブリッジを繰り返す風に突き上げてくる。

力強く脈打つ熱く硬いペニス、腹のほうへ反り返りながら、蜜ヒダをネットリ擦ってきた。奥のほう、中間点、浅瀬。弱い部分を探る風に引つ掻き責めてくる。

淫魔の肉棒は、触手よりも異物感が小さい。燃えているような熱感と、膣も子宮も揺らすような脈動を送り込まれながら、高く張り出したカリ首で引つ掻き回されていると、切迫した甘い喘ぎを搾り出されるだけでなく、

(み、認めたくないが……心地いい……こ、この感覚……すご、い……っ)

心奪われ、うっとりしてしまいそうになる。

否定しようと思うのだが、肉紐の時のように抵抗感が持続しない。触手改造を受けた影響だろう。入り口から奥にかけて敷き詰められた蜜ヒダは溝を深くしており、カリだけでなく幹で二度三度擦られるだけでも、膣の裏で火花が散り、意識が遠のいてしまう。

又チュツ……ズチュツ……ズニユツ、ジュプツ、又ジュツ、又ヂュツ。

腰振りは徐々に早くなっていく。

破瓜の痛みはすっかりなくなり、掻き回される快感が満ちてくる。

「んああッ……ああッ……あッ……んアア……！」

男並みに力強い突き上げを受けるレイアは、暴れ馬に乗った風に翻弄されていた。初めは漏れる程度だった喘ぎ声も、切迫感を孕みだし、恥ずかしい抑揚をつける。

極薄スーツを纏う半球型の胸は、丸みを保ったまま上へ下へと弾んでいた。

(中で……まだ硬く……熱くなつて……ああ……ビクビクしてる……気持ちいい……)

身体の感覚は薄れてきているというのに、ギリギリまで先端を抜かれ、直後に最奥までペニスを叩き込まれる快感だけは、はつきりしている。

蜜ヒダは吸着するように絡みつき、筋肉を鍛え込んだ女將軍らしい押し潰さんばかりの強烈な締めつけを見舞っているので、抜かれる時には腔のすべてを持って行かれるような、突き入れられる時にはヒダの全部をひっくり返されるかのような流動快感だった。

肉をつけさせられた肉唇も、怨敵の肉棒をガッシリ啜え込んでいる。引き抜かれる際には恥知らずに吸いついて、入れられる際には限界まで内側にめくれている。

心奪われるような快感で意識を白ませていると、視界に黒いもやが割り込んできた。

「ふうっ、んっ、クフフ、快感に心を委ねたな、レイア……はあ、はあっ……またわしに、貴重な力を捧げてくれるのじゃな？」

もやの発生源はレイアだった。全身から湯気のように立ち上^{のぼ}っていて、ベラリアの胸元の留め具に吸い込まれている。初めて触手に犯され、力を奪われた時と同じだった。

「し、しまった……ンアアッ……また……ああ、ンン……また私は……ふアアアッ！」

淫魔の吸精能力を発揮するベラリアは、快楽により剥離させた力を奪っている。

「感じてはならないのに……くうッ、ンン……ああッ……駄目だ……ンアアアッ」
力を失えば、それだけベラリアを倒すことから遠ざかる。

そもそもこの力は、味方を犠牲にして得た力。敵にやるわけにはいかないのに。

「ギャハハハ！ 敵に処女を奪われたうえに、犯されてイキそうになつてるぜ！」

「愉快だブロ！ 徹底的にヤつちまえばベラリア様！ イカせて力を吸い尽くすブロ！」
股間を膨らませている魔物たちは、欲望たつぷりの声援を送っている。

王女が魔物などに痴態——人には見せたことのない乱れ姿を晒す恥もあるのだ。

「ああッ、ああ、あッ、あッ……な、なにかくるう……身体の底から何かくるっ！」

王女として、將軍としての半生では経験したことのない、女だからこそ味わえる快感を教え込まれてきたが、身体の中に降りてきている感覚はまたしても未知のものだった。

浮遊感というよりも自分の存在が掻き消えていくような、快感というよりも蕩けるとい
うような。危うさを感じるのに、酷く心引かれる面もあり、戸惑ってしまう。

「んっ、ふうッ、それは『イク』というものじゃ」

「はあ、はああッ、い、いく、だと……ンンッ」

瞳を濡らした目をトロンとさせながら反芻するレイア。

「ふう、はふっ、そうじゃ、イク、じゃ。ほれ言うて見い……イクじゃぞ……んんっ」

「い、イク……ああ、私は、イク？ ンンっ、はあッ、ダメだ……ハア、ハア、抑えられ
な、いっ……ああ……い、イクッ……ああ、イクウ……！！」

ビクビクッ！ ビクビクビクビクビクビク!!!

ガニ股のレイアが顎を跳ね上げ喉を晒したのを見届けると、汗ばみ顔のベラリアは、ヴ



アイオレットの口角を吊り上げながら勢いよくブリッジした。最奥の肉壁にペニスの先がヌッチヨリめり込んだ瞬間、肉棒も膣もけたたましく痙攣し――、

ドビュルッ！ ドグッ！ ビュルルルルル――!!!

（アッ……で、出ている……ンンッ、中に、たくさん出て……はあアッ、この感じ、触手より、すごいッ、膣が灼かれる！ 敵に膣内射精されて、んはアア、穢れていくッウ！）

「おおっ、はあ、ふう、どうじゃ、一緒にイクのは気持ちよからう？ 肉棒のいやらしい律動と新鮮な精液を感じながら女壺でイクのは最高じゃらう？」

異形の瞳を潤ませながら、熱に浮かされた風に語りかけてくる。

腰を上下させ、締めりを強めながら痙攣する蜜肉壺でペニスを抜き、射精する。

女王の膣もしゃぶる風にペニスに抱きつき、淫魔の精液を搾り取りにかかっていた。

「んんっ、たっぷり出すぞレイア……お主も何度もイクのじゃ、その痙攣でわしの肉棒をもっと気持ちよく射精させてくれ……んほおッ、はあ、お主の、ラウラ王国女王の女壺を……お主を下したこの淫魔の精液で埋め尽くしてやるぞ……!!」

汗で艶めかせた顔を紅潮させながら、ペラリアは腰を振りたくる。擦り立てられる絶頂膣はさらにビクビク震え、その振動を引き金にペニスは再び射精する。

頭上で両手を縛られ、騎乗位で身体を持ち上げられているレイアは、初々しい悶え顔で、極薄スーツのしなやか腹をビクンビクン震わせていた。

全身のスーツからはもやが立ち上り、再び淫魔の胸元の留め具に吸い込まれていく。

蜘蛛の糸みたいにネバネバした灼熱の精液は、亀頭の穂先と密着する子宮口を穢し尽くし、竿部にギユウギユウ押されている腔壁に染み込んでいく。触手に注入されていた汁よりもずつと高温で粘度が高く、腹の中はまるで魔女の鍋だ。

「イってるブヒ！ 倒そうとしたベラリア様に出しされて王女がイってるブヒ！」

「見る、ベラリア様のチンポを咥え込んで広がってるマンコから溢れてくるギギ！」

魔物どもの愉快そうな罵声が飛んでくる。

淫魔の肉棒の射精振動。へばりつく精液で、腔内がどんどん重くなる感覚。

嬉々として、獲物を食い散らかしている風なベラリアの表情。

（く……………そお…………）

敵の触手で犯されながら腔を耕された。滅ぼすべき敵に力づくで処女を奪われ、人生初の腔内射精までされた。その上、女の絶頂というものまで味わわされてしまった。身体のスーツはエネルギーの霧となり、ベラリアに吸い取られている。勝利の鍵となる自分の力が吸われてしまっているのだ。

（だが……………私は負けない……………負けるものか…………）

穢されてしまったことを痛感し、心が重苦しくなるのを抑えられないが、なんとか気力を振り絞り、自分に何度も言い聞かせるレイアであった。

グラグラ煮えた胸の中身が残らず噴出し、空っぽになっていく感覚は、限界まで膨らませた尿意を解消した心地よさに似ていた。

「ふう……まだレイア。まだ終わりではないぞ。もっと出すのじゃ。母乳を出してイクのが癖になり、それなしではいられなくなるまで責めは続けるぞ」

レイアの唇と唾液で繋がりながら、顔を離れたベラリアが言ってくる。
毒々しい色合いだった触手が透明になっていく。

触手に握りしめられてひしゃげている乳房の姿と、乳白色の母乳を茎に流し込んでいる乳首の様子が見えてくる。どちらも真っ赤に腫れていて、平素の乳肌の上品な白さ、薄ピンク色の初々しさは影もない。一目で、性行為後だとわかる淫らな姿。

「く……くそうっ……私は負けない……負けないぞっ……！」
汗みずくの赤ら顔できった啖呵が、地下牢に空しく響きわたるのだった。

一昼夜が経過した。

「ゲッゲッゲ！ すげえことになってやがるゲゲ！」

「女將軍のくせに、ベラリア様にも負けないエロパイをぶら下げてるブヒ！」

先日、公開破瓜陵辱が繰り広げられた広間は、下卑た喧噪で満ちていた。

百体ほどの魔物どもは皆、股間に牡欲を漲らせながら、不潔な獣臭さとうだるような熱気を放っている。

異形どもの劣情を煽るのは、触手乳改造を受けたレイアだった。

もうすっかり調教決めポーズとなった、両腕を吊らされる体勢でいる。

「魔物どもが……下劣な目で私の胸を見るなアッ！」

騎士団へ号令を下す時の大声に敵意を乗せて叫ぶ。オークやゴブリンなどの低級モンスターは恐ろしそうに肩を震わせたが、拘束されて手も足も出せない姿を見直すや否や、一層馬鹿にした笑みを送ってくる。

「ククク……魔物も人間同様、大きなオツパイ……巨乳は大好きじゃからのうお……これほど淫らに膨れたのであれば尚更じゃ」

背後に陣取っているベラリアが、煽る風に言ってくる。

格好はいつもの調教衣装。露出度の高いボンテージだった。

（クッ……王女で將軍の私が……こんなみつともない胸にされて……！）

屈辱感と汚辱感で身体を熱くさせながら、奥歯をギリッと鳴らす。

ブルンッ……。

すると振動が伝わって、乳房が能天気には振幅した。

以前ならば絶対に起こらなかつただけに、淫らな腫れぶりには目眩めまいさせられる。

「ふうむ……歯ぎりりだけでも揺れるのか。それは大変じゃな」

魔物どもがドツと笑い、改めて胸元を凝視してくる。

裸の乳房には、紫色の二匹の鉢状触手がかぶりついていて。その根本から伸びる紐部は

チューブトップブラよろしく腋の下を通り、背中に巻きついている。

触手に噛みつかれた双乳は、ベラリアと張り合えるほど豊かに熟れていた。

昨日までのサイズをすっぽり覆っていた触手も、今のバストをカバーしきれていない。前方へとずり落ちて、まるでサイズの合わないブラをしているかのような見た目だった。

大きさだけでなく、形もいい。

釣り鐘を横倒した風な輪郭で、互いにさよならを言うことなく、前方に向かって突き出ている。無論、内乳同士は押しくら餓頭。互いに譲らず、結果、左右の内乳はムッチリと盛り上がっている。余波を受ける上乳も上へこんもり膨れていた。外乳と下乳はゆつたで気分を味わっているが、丸い円周を保ちながら腋の下からはみ出し、あるいは胸板の上で吊り橋のようにたわんでいる。

そのように、肉の弛みがなかった。

鍛えた若娘らしく肌はピンと張っている。歯ぎしりや身じろぎの微かな振動で揺れる時も、肉が波打つと言うよりは、丸い形を保ったまま根本から揺れる。

「こんな揺らし方をしたらどうなるのじゃろうなあ？」

ボンテージと揃いのハイヒールを鳴らし、ベラリアが近寄ってきた。

こちらが何か言う前に、素早く片手を突き出す。

狙いは二匹の鉢状触手の間の細肉紐。

むんずと掴み、汚肉製のチューブブラを力任せに剥ぎ取る。

ブルルンンンツツツ！ブルルルツツツ！ブルブルブルンンン！
「くうっ……ンンンッ……」

蛸に吸いつかれていたも同然だった肌が大きいに引っ張られたせいで、乳房に甘い快感電気が走った。思わず子犬のような情けない声が出てしまい、瞬時に耳まで赤くなる。

「オオオオオオオ!!!」

魔物どものどよめきをBGMに、裸になった乳房は豪快に踊る。

下乳が丸見えになるほど跳ね上がり、胸板と下乳がビタビタ叩き合う。

「王女のくせに……俺たちモンスターをゴミのように虐殺してきた將軍のくせに……なんてオッパイぶら下げてるブヒヒ！」

「身体に吸いつくピッチリスーッ姿……細い括れで……贅肉がないどころか薄く割れた腹筋が浮いてる腹……それにこんなデカパイ！こんなの反則リザ！この間よりもずっとエロくなってるリザ！」

（こいつらッ……好き勝手に言ってる……喜んでっ……貴様らを楽しませるためにこんな胸になったのではないのだぞ！こんなもの……私は欲しくないのに！）

「クク……牡どもの声援を受けてどうじゃ？嬉しいじゃろう」

「そんなわけがあるか！戻せ、この情けない胸を今すぐ！」

唾を飛ばして怒鳴りつけたが、完全に無視された。

ペラリアは指で顎を撫でながら、まじまじと胸元を見ている。

触手体液の白濁粘液は、乳輪と乳首——これらも豊胸に丁度いいサイズに肥大していた——を初めとする乳房全体に、まだまだベッタリ貼りついている。

「このままでは少々見にくいか……そのお前、お前、お前に……」

レイアの横に立つベラリアが、手近な魔物を指さして、

「こやつ胸についた汁を舐めとれ」

命令した。指名された魔物どもは雄叫びを上げ、レイアの前に歩み寄ってくる。

「舐めとれだど……!?!」

「ブヒヒ！ 俺の舌でたっぷり舐めとってやるブヒ！」

「ギギ！ 王女將軍のデカチチを舐められるなんてついてるギギ！」

緑色の皮膚、樽のように膨れた腹、手足と頭が豚のオークが下品に笑った。

顔だけなら野卑な男とも見れなくはない、茶色い体毛びっしりのゴブリン。

角を生やし、金棒を持つ筋骨隆々なオーガは、赤い者と青い者が選ばれた。

「魔物どもが……私に触れたら命はないと思え！ 乳房を見た者も絶対に殺す！」

「威勢のいい奴メ！ ベラリア様に処女を奪われ、今度はオッパイを改造された癖に、ま

だ身の程をわかっていないらしいナ！」

「俺たちがたっぷりわからせてやるギギ！」

キッと睨みつけたレイアを、逆に嘲笑する魔物ども。

指名された魔物以外は、「やれやれ！」だの「思いきり舐めしゃぶれ！」だのと下劣な

ヤジを飛ばしており、恐れる者など一体たりともいなかった。

赤と青のオーガが背後に立ち、万歳状態の腋の下から顔を覗かせた。

「私から離れる、下劣な魔物め！」

「フンッ……それにしてもいい匂いだぜ……この匂い、ベラリア様と同じだな」

「匂いだと？ 当たり前だ……胸に付着する汁はベラリアの触手が吐いたものだからな……」

……貴様たちも、粘液を出していた触手が剥がされるのを見ていただろう……！」

これから舌陵辱をしようとするオーガに、怒気を込めて言い放つ。

（触手の汁はこんなに生臭い……栗の花のような臭いだというのに……どうしていい匂いと感じられるのだ、魔物は……こんな美的感覚の奴に舐め回されるのか……！）

「違ウ。汁じゃない。貴様の体臭のことだ」

そう言つて、腋の下に鼻を押しつけスンスン鼻息を響かせる。赤いオーガがすると、反対側の青いオーガも倣つた。腋の下に魔物の硬い鼻の感触が擦りつけられると、薄いむず痒さに襲われて、身体が腰からくねってしまふ。

「汗のツンとくる匂いに混じつて、嗅ぐだけで勃起するイイ匂いが出てやがるぜ」

「ああ、確かにそうダ。これはベラリア様と同じ、イイ匂いだナ」

「なんだと……私の体臭がベラリアと同じ……？」

敵と同じ匂いだということは衝撃的だった。さらに驚くのは、嬉しそうに腋の下の臭いを嗅ぐ魔物どもの肉棒が、激しく脈動していることだ。

（私の匂いが……魔物どもを興奮させている？ 匂いだけで？ ……いやそんなはずは……人間の匂いに発情する魔物など聞いたことがない……こいつらは、敵の私を嬲れる状況に興奮しているケダモノなだけだっ）

動揺するレイアは、胸中でそう結論づけた。しかし、

「それはそうじゃろう。わしの汁に触れ続けた人間は、淫魔が振りまく発情臭を放つ身体にもなる。膣と胸……レイアはたっぷり漬かったからのお」

「発情臭……だと？」

「種族も性別も関係なく作用するものじゃ。精神力の強い者には効きにくい……お主とて、わしの匂いを嗅いで完全に正常ではなかったはずじゃぞ」

確かに、ベラリアの体臭に奇妙な安息感を覚えたことはある。

人間の場合、興奮するだけでなく安心感もなければ発情することはないらしい。自分は陵辱される虜囚の身。考えてみれば、いくらベラリアの手管が巧みでも、身体は興奮しすぎていた。知らぬ間に、ベラリアの体臭の影響を受けていたと思えば納得できる。

「ブヒヒ！ 興奮するブヒ！ 淫魔化してる牝將軍を舐めるブヒ！ ペロン！」

「ギギギギ！ 俺も舐めるギギ！ レロンッ！」

いつの間にか正面に来ていたゴブリンとオークが舌を使う。

食べ物の発酵臭混じりの熱い息を吐きながら、横乳下部を舐め上げる。

横から顔を出していたオーガどもは、各々上乳を舐めてきた。

魔物の舌の作りは人間と同じ。色は皮膚に準じている。

「ぐっ……貴様ら……ううッ……」

ヌメった唾液を纏わせた、プリプリの舌が四枚、横乳と上乳を舐めてくる。半透明の白濁液を舐めとりながら、弾力の強い乳房の感触を味わっていた。

「いい舐め心地ダ！舌で押ししても強く押し返してくル！」

「こんなにデカいうえに肌の張りも強いプヒ！」

「美味いギギ！ベラリア様の汁の味も、この牝王女の汗と肌の薄甘い味も最高ギギ」汁を舐めとるどさくさに紛れ、四枚の舌は不必要な動作まで行っている。

ふっくら膨らむ横乳の頂点に舌を突き刺し、抉る風に舌先を擦りつけてくるもの。鎖骨から乳輪に至る直線に沿って、舌のざらつきで乳肌を研磨するもの。

柔らかく反り返る下乳にかぶりつくと、吸い上げながらペロペロ舐めるもの。

手のひらの長さに伸ばした舌で、グミのように赤く充血した乳首を転がすもの。

（そんなに胸ばかり舐められては……熱くなってしまう……くうっ）

触手の繊細な責めに比べれば大ざっぱな責めではあるが、舌の踊り場と化した乳房はカツカと赤熱し、一回り大きくなり始めている。

（なんだ、この感じは……おかしい……触手にやられた時と違う……？）

乳房全体に生まれ、蓄積していく甘い痺れに、胸の切なさまでもが加わってくる。

熱心に舐めしゃぶる魔物の様子を見ると、まるで子どもにじゃれつかれているかの

ような温かな感情が芽生えてくる。

(そんな……こいつらは魔物……汚らしく、我が民に悪行を働いた奸賊……あの子たちとは違うのだぞ……)

避難民の無邪気な子どもたちのことが脳裏をよぎった。意思とは無関係に湧いてくる感情を頭を振って否定しようとしたが、乳房を殴りつける風に舌を突き刺し、虫のように這われる乳悦は消えない。至る所が魔物の唾液でテラテラ輝く双乳は、どんどん火照り、掻き塗りたくなる甘ったるい疼きの塊になっていく。

「はあっ……はああ……おかしくなりそうだ……ああ、貴様ら離れろ……むね、を、んんっ、あふうあ……舐めるなあっ……」

思いきり恫喝しているつもりだったが、どうしても途切れ途切れになってしまい、怒声も甘い喘ぎ声に変わっていた。これでは魔物どころか猫だって驚かない。一軍を指揮する女将軍の声音と信じる者など、自分を含めていないだろう。

「よし、やめい。下がるがいい貴様ら」

ボンデージ姿のペラリアが静かに言うと、口の端から涎をこぼしこぼし舐め続けていた魔物どもがいそいそと退散した。

「ふむ……汁のなくなった乳房は……フフ、一段といやらしいなあ……将軍も務める王女がぶら下げていていいものではないのお」

「んっ……はあ……はあ……そんなに、この胸を見るなあっ……」



逆三角のいやらしい尖りが内部をかき分け、竿が自分の形に固定する。

お湯じみた温かさの発情汁が、卑猥な水音を出しながら結合部から漏れていく。

一度は自分を追いつめた癖に、牝奴隷宣言するまでに堕ちた王女を犯す悦びに打ち震え、ビクビク生命力たっぷりに振幅している。

牝奴隷に成り下がった王女の膺は、憎むべき淫魔の肉棒をキュウキュウ締めつけ、奥へと引っ張っている。

「んああ、アアッ……アウンン、ンンッ……ンおおおオオオ……！」

ゆっくり進み、一度最奥の手前で止まったあと、たっぷりとタメ、思いきり子宮口を突いてきた。

子宮全体が揺さぶられる快感衝撃に、レイアはあられもなく叫ばされる。

ペラリアは細い淫魔の尻尾を鞭のようにしならせながら、猛然と腰を振り始める。

「ああレイア……あなたがそんなはしたない声を出すなど……本当に気持ちがいいのですね……わかります……ああっ、でも羨ましい……ねえレイア、わたくしの中のあなたも動かし、ね？ 犯されながら、わたくしも犯して……」

「む、無理ですエイリスっ……ンオオッ、こんなに、激しく犯されたら、ンヒインア、エイリスとセックスするどころでは、中を締められても……アアッ、腰、振りたいっ、エイリスとオマンコしたい、けど、ああ、腰振れない、アッアンン……！」

母女王は犯して欲しそうに、精液で満たされた膺をキュッキュッと締めつけ、ヒダ肉を

うねらせてくる。

全身愛撫を受けるペニスはピーンと突っ張るのだが、射精するには刺激が足りない。自分が腰を振るしかない。しかし、ベラリアに突き回される快感で全身が脱力してしまっているのではどうしようもない。媚肛門にも触手が潜り、だめ押ししてくる。女の部分に快楽を味わわされるほど、牡のシンボルは焦らし責めされている風になり、気持ちがいいのかもどかしいのかわからない感覚に頭が焼き切れそうだった。

「お主もエイリスもわしの牝奴隷……エイリスを抱けるかどうかは、支配者であるわしの一存で決まるものだとかわかったか？」

牝奴隷に墮とした王女を躡ける風に、腰を振りたくるベラリア。

調教で豊かにした尻尻を驚掴みにし、指の間から柔らかな尻肉を盛り上がらせる。柔らかい股間を打ちつけて、女帝の如き余裕も貫禄もたつぷり滲ませ、責め立てる。

責められるレイアは、堪らなそうにギョツと目を閉じ、エイリスにしがみつく。

快感が大きいほど蜜を漏らす風に改造された膣内はもうぐしょ濡れだった。

濡れた蜜ヒダはべったりカリに絡みつくので、引つ搔かれると切迫した喘ぎ声が飛び出してしまう。

子宮口を突かれる衝撃は、一回一回猛烈だった。余計な感情を粉微塵にし、絶対に逆らえないという服従精神を魂に刻み込まれているよう。

（はあ、はああつ、こんな奴、勝てるわけがないっ………ああ、許しを請うしか、あう

っン牝奴隷らしく哀願して、エイリスとエッチさせてもらうしか……！)

ベラリアのセックスには、女壺の快楽を味わうだけでなく、組み伏せる牝の価値観を壊し、自分に隷属させてやるという荒々しい情念が籠もっている。これまでの調教で淫らかつ貪欲な身体に成熟させられ、精神的な寄り所としていたものをことごとく壊されてきた自分には、抗うことなどできはしない。全身に絡む触手は敗北の象徴だ。

「ふう……はあ……出すぞレイア……身の程はわかったな？ お主はわしの牝奴隷じゃ……未来永劫、な……ンンッ、さあ、たつぷり穢れ汁を注いでやる……」

「アッ、アンッ、ああ、出るう……わ、私の中に、精液出るッッ……牝奴隷って思い知らせようとしてるチンポが……おつきな淫魔クリチンポが、中でえ、暴れて……！」

「はあ、はあ、これで女王將軍が滅び、元女王將軍の牝奴隷が誕生する……ンンッ、祝いじゃ、後で精根尽きるまでエイリスと抱き合うのを許す……んおおおッ！」

「あああ、ビクビクしてるッ、牝奴隷マンコ広げてビクビクして……ンンッ、ア……ッ、アアッ……アアアアアアアア……ッッッッッッッッッッッ!!!」

ビュンッ！ ビュルルル!! ビュブ~~~~~!!!

誰が主なのか教え込む風に股間を突き上げられた瞬間、押し上げられた最奥に、灼熱粘液の感触が広がった。ビュルビュル容赦なく追加され、膣内がズッシリ重くなる。

征服欲を満載させた精液は子宮口を沈ませた。逆流してくると、肉棒の肌と密着する蜜ヒダの微細な凹凸に染み込んで、ベラリアに射精されるということがどんなことをかを刻み

込んでいく。

（あぁっ……精液出てる……オマンコ揺さぶりながらドクドク吐き出して……アア、支配されるッ……こんな射精されたら、逆らえなくなる……これをしてもらえるなら、なんでも言うことを聞きたくなる……!）

淫魔の精液が染み込んでいく蜜ヒダも触手唾える肛門も、嬉しそうに痙攣していた。眉尻がトロンと垂れ下がる。雄々しく責め立て、夫よりもいいと言わせたエイリスの眼前で、心も身体も制圧されて悦ぶ牝の顔を晒す。

「あ、あぁ……レイアばかりずるいっ……わたくしも、わたくしも欲しいのにつ、蕩けさせて欲しいのにつ……クリオチンポ入れられっ放しで、切ないの……!」

「わしがくれてやる……女壺はレイアので埋まっているからな、尻で満たしてやろう」
「はぁぁっ……嬉しいですッ……ベラリア様ぁ……!」

「強制しておらんに様づけか。わしはお主の敵で、滅ぼされかけたのじゃがなぁ」
腰を引き、レイアの膣から肉棒を抜くベラリア。

黄ばんだ精液と愛液の混合汁を撒き散らし、抜かれた肉棒が腹まで反り返る。
まだまだ硬く熱く太い。女を淫らに鳴かせ、屈服させる機能は十分だった。

レイアに屈従精神を刻みつけた肉棒の先を、汗ばんでヒクつく淫肉門に押し当てる。
ジュブブッ、ジュズズズ……。

「ウウウウンンン……! 申し訳ありません、ベラリア様ぁ、あの時は、レイアを辱め

られて怒っていたからでえ……でも、レイアも牝奴隷になりましたから、エイリスはもう逆らいませんっ、お尻、気持ちよくほじつてくださいませえンンッ」

女王らしい上品な言葉遣いに下品な抑揚。美声は媚声に裏返っていた。

目の前に娘であり、肉棒で散々よがらせてくれたレイアがいるにもかかわらず、別のクリペニスにいやらしく尻を振っている。

「ンホオオオオオオ〜！ お尻、堪らないですっ、ペラリア様のオチンポ最高お」
捕らえられたあと、娘ともども調教された尻を前後動させ、淫魔の腰に息を合わせる。

快感に比例して汁が出る体質にされていたので、何度カリ首に掻き出されても、恥蜜は地面に染みを作り、牝臭をなすりつける。

適度に肉の弛んだエイリスの太腿が地面に投げ出され、粘っこい痙攣を繰り返す。曇天を向きながら小さく跳ねるヒールの足指は、長靴下の中で何度も丸くなっていった。

「オオッ、オホオオッ、お尻にグリグリくるうウウ……アアッ、アッ、アアアッ、お尻だけなのに感じちゃうっ、お尻だけでイッチャいそうです、ア〜ッ〜ッ〜！」

尻でイクという言葉が嘘でないのは、上から覆い被さっているレイアにはわかった。

前半身同士を密着させて倒れ込んでいる母の身体は、火傷しそうなくらいに熱く、香しい汗を存分に噴き出している。

（エイリス……ああ、本当にアナルセックスに感じているのですね……あんなに凜として、淑やかだったのに……こんな変態行為でよがってしまった……）

総身は間断的に痙攣しているが、特に腹の振幅が酷い。ひっきりなしに荒い呼吸をしている証左は、こちらの腹まで揺すってくる。

「アッ、アアッ、躡けられちゃいます、ベラリア様のオチンポに、牝奴隷だって、わたくしは牝奴隷に成り果てたって、心の底から認めさせられ、おホオオオオ〜〜〜〜!」
（牝奴隷に墮ちるとわかつているのに……すごく興奮している……あ、はああ、中、締まって……あああ、アヌスを犯すペニスがズリズリ肉を擦る振動が……エイリスのオマンコに包まれた私の勃起クリペニスにまで伝わって……ああッ、興奮する……!）

以前ならば想像もできなかったエイリスの痴態を目の当たりにし、アナルセックスの律動を感じていると、ペニスの芯から力が漲り、根本から湧いてくる射精衝動に胸がゾクゾクしてくる。

「はあ、ふうっ……さあ、出すぞ……母娘ともども、わしに精液を注がれて、ンンっ、牝奴隷に墮ちたと自覚するがいい……おとおッ!」

股間で尻タブをムニユリと潰し、一番奥まで肉棒を挿入したベラリアは、その場で小刻みかつ素早く抜き差しする。奥の奥まで自分とのセックス感触を刷り込もうとしているかのような責め方だった。巻きつく触手も全身を撫で、敗北屈従快感を刻んでくる。

「ンああアア……奥でビクビク言って……ンホおおオオオオ〜〜〜〜!」

ビュルルッ! ビュグググ! ビュビュビュウウウ〜〜〜!

ベラリアが膝立ちブリッジした直後、女王の尻の奥深くで、淫魔の射精が始まった。



ませて、ハッハッと犬のように喘ぎ、だらしなく舌をはみ出させる様子は、欲望に魂を蕩けさせている牝の顔。女王の尊厳も母の慈愛もすっかり崩れ落ちていた。

ヌポッ……ドロオ………。

ベラリアが腰を引く。精液と腸液の小さな滴を飛ばしながら、肉棒は勢いよく反り返る。湯気が見えそうな熱気を放っていた。亀頭の先と肛門は、黄ばんだ汁の粘糸で繋がっている。それと同時に、肉棒の先端に絡みついていた和合水がゆっくり根本に伝っていく。

「んはああああ………はあああ………」

顔を紅潮させながら、エイリスは満足そうな溜め息をつく。

肛門からは、注がれた汁の固まりがゆったりこぼれ落ちる。

征服された女王の尻が、征服した淫魔の汁を涎のように垂れ流す。

「くそう……淫売どもめッ！ 負けただけじゃなく、牝奴隷だと？」

「俺たちから全部奪った魔物に犯されたつてのに、なんてスケベな顔してやがる！」

罵声を浴びせてきたのは生き残った男たちだった。

数十人ほどの者たちは、敗北した王族母娘を取り囲む。ベラリアがいても構わない。

埃だらけで衣服を部分部分裂けさせているが、命に別状はなさそうでもある。股間を盛大に膨らませているのだから。異様に血走る目が宿すのは、憎悪と憤怒、それに性欲。

「魔物のような連中じゃ……そうだレイア、エイリス。連中の感情は、元はと言えばお主たちがわしの軍門に降ったのが原因……謝罪してやるがよい」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元 **ドリームマガジン**
ED DREAM MAGAZINE

対魔忍アサギ3
高浜太郎 著・Anime Earth
不良っ娘エロバトル!
ばんかラブ!
歌麿

奇数月の特集 **アナル責め**

偶数月 **17日発売**

KTC特製 **スポーツオール発売決定!**

ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

COMIC UNREAL
06 2013 JUNE
price 680yen
祝・7周年!
アンソロジー全巻バック
スペシャルインタビュー

Hisasi
エロト・S・S
ドモセションソク

不思議の海へ **飛び込んで**

奇数月 **12日発売**

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

対魔忍アサギ3
高浜太郎 著・Anime Earth
不良っ娘エロバトル!
ばんかラブ!
歌麿

奇数月 **12日発売**

下旬発売 **ヒロインが**
ちまくるアンソロジー!

MEGAMI CRISIS
メガミ クライシス

COMIC UNREAL

メガミ クライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。